

関係各位

京都府病虫害防除所長
(公 印 省 略)

病虫害発生予察情報について
下記のとおり発表しましたので送付します。

病虫害発生予報第5号 (7 月)

予報の概要

作物名	病虫害名	予想発生量 < 平年比 (前年比) >
イネ	葉いもち 紋枯病 セジロウカ ツマグロヨコバイ 斑点米カメムシ類	<u>やや多</u> (やや多) 並 (多) 並 (並) 並 (やや多) <u>やや多</u> (やや多)
ダイズ、 アズキ	アブラムシ類とウイ ルス病	やや少 (やや少)
ナシ	黒斑病 黒星病	<u>やや多</u> (やや多) 並 (並)
ブドウ	べと病	<u>やや多</u> (やや少)
カキ	うどんこ病	やや少 (やや多)
果樹全般	ハダニ類 カメムシ類	並 (ナシ : 少) (ブ ドウ、カンキツ : 並) <u>やや多</u> (やや多)
チャ	炭そ病 チャノコカクモンハマキ チャノホリガ カンザリハダニ	<u>やや多</u> (山城 : やや多) (丹波 : 並) <u>やや多</u> (山城 : 多) (丹波 : やや多) <u>やや多</u> (多) <u>やや多</u> (山城 : 並) (丹波 : やや少)

作物名	病虫害名	予想発生量 < 平年比 (前年比) >
チャ	チャノキイロアサミウマ チャノミドリ ヒメヨコバイ クワシロカイガラムシ	並 (並) 山城 : <u>やや多</u> (並) 丹波 : 並 (並) 並 (山城 : 多) (丹波 : やや少)
果菜類	疫病・褐色腐 敗病 うどんこ病 アブラムシ類と モザイク病 アザミウマ類 ハモグリハエ類	<u>やや多</u> (やや多) <u>やや多</u> (やや多) やや少 (やや少) <u>やや多</u> (多) <u>やや多</u> (やや多)
ウリ類	べと病 炭そ病	並 (並) <u>やや多</u> (やや多)
キュウリ、トウ ガラシなど	斑点細菌病	<u>やや多</u> (やや多)
ネギ	ネギアサミウマ ネギハモグリハエ	<u>やや多</u> (並) 並 (並)
野菜全般	ハダニ類	<u>やや多</u> (やや多)

目次

予報の概要 1
予報本文 2
今後注意すべきその他の病虫害等 11
参考 I 気象予報 12
II 用語の定義 12
III 予報本文の見方 13

予報本文

イ ネ

1 葉いもち

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 病害虫調査協力員から、苗いもちの発生が報告されている（+）。
- (2) 6月中旬現在、本田では中丹地域で発生を認めている。
- (3) B L A S T A M（いもち病発生予察システム）によると、感染好適条件が6月中旬から出現している。
- (4) 向こう1か月の気温は高く、降水量は日本海側で平年並または多く（+）、太平洋側で多い（+）。日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 補植用苗が葉いもちの発生源となるので、放置したままの苗は早急に抜取り処分する。
- (2) いもち病の発生は気象に大きく影響されるので、曇雨天が続く場合には注意する。
- (3) ほ場の見回りを行い、肥料がムラ効きしているところを中心に、下葉に発病していないかどうか調べる。特に多肥田や山間、山沿いの水田では注意する。

2 紋枯病

予報内容 発生量：平年並（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、発生を認めていない。
- (2) 前年8月の発生量は平年比やや少ない（-）。
- (3) 向こう1か月の気温は高く（+）、降水量は日本海側で平年並または多く（+）、太平洋側で多い（+）。日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 分けつ期ごろに水際葉鞘に発生し、その後水平、上位方向に進展する。
- (2) 早植栽培で発生が多く、気温30℃前後で多湿条件が続くと多発する。
- (3) 出穂20日前の発病株率が20%以上であれば薬剤散布を行う。散布は発病部である葉鞘によく付着するように株元を狙って行うようにする。なお、穂いもちとの同時防除を考慮する。
- (4) 昨年多発したほ場では、深水管理をしない。
- (5) 窒素の多用を避け、過繁茂にならないよう施肥管理に注意する。

3 セジロウンカ

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 6月第2半旬現在、予察灯での誘殺を認めていない。
- (2) 6月中旬現在、本田での発生を認めていない（平年並）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 梅雨期に海外から飛来し、吸汁加害する。

- (2) 梅雨前線の活動が活発化すると多飛来することがあるので注意する。
- (3) 7月中旬以降、ほ場を見回り、株当たり10頭以上の発生を認めた場合は防除する。なお、幼虫は株元に生息しているので、薬剤が株元までかかるよう丁寧に散布する。

4 ツマグロヨコバイ

予報内容 発生量：平年並（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在の発生量は平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 直接吸汁加害する他、萎縮病等を媒介する。

5 斑点米カメムシ類

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、畦畔での発生量は平年比やや多い（+）。
- (2) 向こう1か月の気温は高いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 稲穂を吸汁加害し、斑点米の原因となるカメムシ類には多くの種類がいるが、近年、カスミカメムシ類による被害が増加している。
- (2) 水田周辺のイネ科雑草の穂を餌にして増殖し、本田へ侵入するので、草刈りを行い、イネ科雑草の出穂を防ぐ。
- (3) 草刈りは出穂2～3週間前と出穂直前の2回行うと効果的である。1回で済ませる場合は、出穂10日前までに行う。なお、刈取り時期が遅れると逆効果になるので注意する。
- (4) 近年多発し問題となっている地帯では穂揃期と傾穂期の防除（共同、一斉）が有効である。
- (5) 平成22年10月に確認したミナミアオカメムシは、他の斑点米カメムシ類に比べて体が大きく吸汁量が多いため、少数でも被害が大きくなるので注意する。

※今後注意すべきその他の病害虫等はp11を参照

ダイズ、アズキ

1 アブラムシ類とウイルス病

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 6月第3半旬現在、アブラムシ類の黄色水盤での誘殺数は平年比やや少ない（-）。
- (2) 病害虫調査協力員から、他作物でアブラムシ類の発生が多いと報告されている（+）。
- (3) 向こう1か月の気温は高く、降水量は日本海側で平年並または多く（-）、太平洋側で多い（-）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 作付け時からシルバーテープ等を用い、アブラムシ類の飛来を防止する。また、ほ場周辺のマメ科雑草を除去する。

(2) ウイルス病はアブラムシ類が伝搬するので、発生初期の防除に留意する。

果樹

1 ナシ 黒斑病

予報内容 発生量： 平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、発生量は平年並。
- (2) 向こう1か月の気温は高く、降水量は日本海側で平年並または多く（+）、太平洋側で多い（+）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 6月から7月の梅雨期が感染最盛期であり、雨が降り続くと被害が多くなる。
- (2) 袋掛けは早めに行い、袋掛けの直前に必ず薬剤を散布する。

2 ナシ 黒星病

予報内容 発生量： 平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。
- (2) 向こう1か月の気温は高く（-）、降水量は日本海側で平年並または多く（+）、太平洋側で多い（+）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 雨が続き、涼しい年に発生が多くなる。
- (2) 夏から秋に、徒長枝に発病しやすい。

3 ブドウ ベと病

予報内容 発生量： 平年比やや多い（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。
- (2) 向こう1か月の気温は高く（-）、降水量は日本海側で平年並または多く（+）、太平洋側で多い（+）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 雨が多く、気温が低めに経過すると多発しやすい。
- (2) ハウス栽培では、過繁茂を避け通風をよくする。

4 カキ うどんこ病

予報内容 発生量： 平年比やや少ない（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在の発生量は平年比やや少ない（-）。
- (2) 向こう1か月の気温は高く（-）、降水量は日本海側で平年並または多く（+）、太平洋側で多い（+）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 6月から7月に雨が多いと、葉に被害が現れやすい。
- (2) 冷夏では、夏場も発病が続く。

5 ハダニ類（カンキツ、ナシ、ブドウ）

予報内容 発生量：平年並（ナシ：前年比少ない）
（ブドウ、カンキツ：前年並）

予報の根拠

- （１）６月中旬現在の発生量は、ナシ、ブドウ、カンキツとも平年並。
- （２）向こう１か月の気温は高く（＋）、降水量は日本海側で平年並または多く（－）、太平洋側で多い（－）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）梅雨明け以降、急激に増加するので注意する。
- （２）年間世代数が多く、薬剤抵抗性がつきやすいので、同一系統の薬剤を連用しない。
- （３）合成ピレスロイド系薬剤を連用すると、ハダニ類が多発する場合がありますので注意する。

６ カメモムシ類（チャバネアオカメモムシ、クサギカメモムシ等）

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- （１）予察灯での誘殺数は平年並。
- （２）チャバネアオカメモムシのフェロモントラップでの誘殺数は平年比やや多い（＋）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）園外から侵入し、局地的に発生するので、特に山林などの隣接園では注意する。
- （２）カキ、ナシ、ミカン、モモなどの無袋栽培では、被害が多くなる。

チャ

１ 炭そ病

予報内容 発生量：平年比やや多い（山城：前年比やや多い）
（丹波：前年並）

防除適期：三番茶芽の第１～２葉開葉期

予報の根拠

- （１）６月中旬現在の発生量は、平年比やや多い（＋）。
- （２）向こう１か月の気温は高く、降水量は日本海側で平年並または多く（＋）、太平洋側で多い（＋）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）伝染源は、摘採されずに残った前茶期の病葉である。
- （２）本病が感染するのは新葉に限られ、新芽生育期に降雨が続くと発生が多くなる。

２ チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：平年比やや多い（山城：前年比多い）
（丹波：前年比やや多い）

第２世代幼虫ふ化期：

７月第３半旬～７月第４半旬（平年比やや遅い）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、第1世代の発生量は山城で平年比やや多く(+)、丹波でも平年並。
- (2) フェロモントラップでの誘殺盛期は宇治で平年比遅く、綾部で平年比やや遅い。
- (3) 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量は日本海側で平年並または多く、太平洋側で多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、第1世代成虫が6月下旬～7月上旬に発生し産卵する。4回世代を繰り返す。
- (2) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

3 チャノホソガ

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年比多い)
第3世代幼虫ふ化期：

7月第5半旬～7月第6半旬(平年並)

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在の発生量は山城で平年並、丹波で平年比やや多い(+)
- (2) フェロモントラップでの誘殺数は、宇治で平年比多く(+)、綾部で平年並。
- (3) フェロモントラップでの誘殺盛期は宇治、綾部ともに平年並。
- (4) 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量は日本海側で平年並または多く、太平洋側で多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、5回世代を繰り返し、7月上中旬に第2世代成虫が発生し産卵する。
- (2) 卵は3～7日でふ化し、新芽を加害する。
- (3) 弧状仕立て園の防除適期は、三番茶芽の第2葉開葉期である。

4 カンザワハダニ

予報内容 発生量：平年比やや多い(山城：前年並)
(丹波：前年比やや少ない)

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在の発生量は山城、丹波とも平年並。
- (2) 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量は日本海側で平年並または多く(-)、太平洋側で多い(-)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 繁殖力は10～30℃の範囲で高温の時ほど高いが、降雨により増殖が抑制される。
- (2) 通常、葉の裏側に生息するので、薬剤は葉裏にかかるよう丁寧に散布する。
- (3) 園をよく見回り、発生の多い園では二番茶摘採後の防除に留意する。

5 チャノキイロアザミウマ

予報内容 発生量：平年並(前年並)
防除適期：新芽伸育期

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在の発生量は山城、丹波とも平年並。
- (2) 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量は日本海側で平年並または多く(-)、太平洋側で多い(-)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に二番茶期以降に増加し、夏秋芽を吸汁加害する。
- (2) 多雨により発生は減少するが、生息密度が高いと多少の雨では影響が小さい。
- (3) 発生の多い園では、三番茶芽の萌芽期と第1葉開葉期の2回散布の効果が高い。

6 チャノミドリヒメヨコバイ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い(前年並)
 丹波 平年並 (前年並)
 防除適期：新芽伸育期

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在の発生量は山城で平年比やや多く(+)、丹波で平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 二番茶期以降、発生が多くなる。

7 クワシロカイガラムシ

予報内容 発生量：平年並(山城：前年比多い)
 (丹波：前年比やや少ない)

予報の根拠

- (1) 第1世代幼虫の発生量は、平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間3回(一部山間部では2回)発生する。
- (2) 多発している園も認められるので、園を見回り発生の多い園では注意する。
- (3) 第1世代の発生が多かった園では特に注意し、幼虫ふ化期の防除に留意する。世代が進むほど幼虫ふ化時期がばらつき、ふ化期間が長くなるため、第2世代の防除は2回散布の効果が高い。
- (4) 薬剤散布は株内部の枝に十分かかるように行う。

※今後注意すべきその他の病害虫等はp11を参照

野菜

**1 果菜類 疫病・褐色腐敗病
 (キュウリ、トウガラシ、トマト、ナス、スイカ、カボチャ等)**

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年比やや多い)

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、巡回調査では発生を認めていない。
- (2) 向こう1か月の気温は高く、降水量は日本海側で平年並または多く(+)、太平洋側で多い(+)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 水によりまん延することが多いので、ほ場の排水に努める。特に降雨時の地表水を速やかに排水する。

(2) マルチを行って、はね上げ伝染を防ぐ。また、溝に落ちて浸水したと思われる蔓は摘除して、ほ場外へ持ち出し処分する。

2 果菜類 うどんこ病 (キュウリ、トウガラシ、トマト、ナス、スイカ、カボチャ等)

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年比やや多い)

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、キュウリでの発生量は平年並。
- (2) 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量は日本海側で平年並または多く、太平洋側で多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 初発生時期が早いと多発し、被害が大きくなる。
- (2) トウガラシ類では、ハダニの被害と類似しており判断がつきにくいので十分注意する。
- (3) トウガラシでは菌糸が組織内で増殖するため薬液が十分付着するようていねいに散布する。

3 ウリ類 べと病

予報内容 発生量：平年並(前年並)

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、発生を認めていない(平年比やや少ない)(-)。
- (2) 向こう1か月の気温は高く、降水量は日本海側で平年並または多く(+)、太平洋側で多い(+と)予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 病原菌は、多湿条件で侵入、まん延しやすい。
- (2) 肥切れしたり草勢が衰えないように肥培管理に注意する。

4 ウリ類 炭そ病

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年比やや多い)

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、発生を認めていない。
- (2) 向こう1か月の気温は高く、降水量は日本海側で平年並または多く(+)、太平洋側で多い(+と)予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 種子伝染する他、被害作物の残さ、資材等が伝染源となる。
- (2) 夏秋作に発生しやすいので注意する。

5 斑点細菌病(キュウリ、トウガラシなど)

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年比やや多い)

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、発生を認めていない(平年並)。
- (2) 向こう1か月の気温は高く、降水量は日本海側で平年並または多く(+)、太平洋側で多い(+と)予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 降雨等により病原細菌が飛散し、葉及び果実の気孔等から侵入し発病する場合が多い。

- (2) 曇雨天が続くと急速にまん延するので、気象の変化に注意する。
- (3) 発生してからでは防除が困難となるので、予防防除が重要である。

6 ハダニ類（チャノホコリダニを含む）

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、キュウリでは発生を認めず（平年並）、ナスでは平年比やや多い（+）。
- (2) 向こう1か月の気温は高く（+）、降水量は日本海側で平年並または多く（-）、太平洋側で多い（-）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に葉裏に生息し、乾燥条件で発生しやすい。
- (2) 梅雨明け後急激に増殖するので、梅雨明け後の防除が大切である。
- (3) 雨よけ栽培では発生しやすいので十分注意し、発生初期の防除に留意する。

7 アブラムシ類とモザイク病（果菜類）

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、アブラムシ類の発生量はナスで平年並、キュウリで平年比少ない（-）。
- (2) 6月第3半旬現在、アブラムシ類の黄色水盤での誘殺数は平年比やや少ない（-）。
- (3) 向こう1か月の気温は高く、降水量は日本海側で平年並または多く（-）、太平洋側で多い（-）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) アブラムシ類には直接吸汁加害するだけでなく、モザイク病を媒介するものもいる。
- (2) 通常、無翅虫で集団加害する。
- (3) 密度が高まると有翅虫が現れて分散・飛来し、発生が拡大する。
- (4) キュウリの急性萎凋症の発生の多いところでは、アブラムシ類の飛来に特に注意する。

8 アザミウマ類（果菜類）

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在の発生量はキュウリで平年並、ナスで平年比やや多い（+）。
- (2) 向こう1か月の気温は高く（+）、降水量は日本海側で平年並または多く（-）、太平洋側で多い（-）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) アザミウマ類には直接加害するだけでなく、ウイルス病を媒介する種もいる。
- (2) 雨よけ栽培では発生が多くなるので注意する。

9 ネギアザミウマ（ネギ）

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在の発生量は平年比やや多い(+)。
- (2) 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量は日本海側で平年並または多く(-)、太平洋側で多い(-)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間、10世代以上くり返し、葉の表層を食害、かすり状の食害痕を残す。
- (2) 葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- (3) 作物残さは発生源となるので処分する。

10 ハモグリバエ類(果菜類)

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年比やや多い)

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在の発生量はナスで平年並、キュウリで平年比やや多い(+)。
- (2) 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量は日本海側で平年並または多く、太平洋側で多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 苗からの持ち込みを防ぎ、被害植物の残さは土中に埋めて処分する。施設栽培では、開口部に0.8mm目合いの防虫ネットを張る。
- (2) 黄色粘着ロールをハウス周囲及び開口部に展張する。
- (3) 発生を認めたら被害葉を取り除き、発生初期の防除に留意する。
- (4) 施設マルチ栽培では、マルチ上に落ちた蛹を掃き集めて処分する。

11 ネギハモグリバエ(ネギ)

予報内容 発生量：平年並(前年並)

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在の発生量は平年並。
- (2) 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量は日本海側で平年並または多く(-)、太平洋側で多い(-)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。
- (2) 作物残さは発生源となるので処分する。

※今後注意すべきその他の病害虫等はp11を参照

今後注意すべきその他の病害虫等

イネ

1 トビイロウンカ、コブノメイガ

6月第2半旬現在、トビイロウンカの予察灯での誘殺を認めていない。いずれも海外飛来害虫であるため、今後梅雨前線の活動が活発化すると多飛来することがあるので、予察情報に十分注意する。

2 白葉枯病

- (1) 暴風雨などが予想される時は深水にするなど、極力葉の損傷を少なくするよう努める。
- (2) 窒素肥料の多用を避けるほか、茎立後、葉が濡れているときにほ場に入らないなど注意する。

3 イチモンジセセリ（イネツトムシ）

晩植田や肥効田で発生が多くなる。防除時期は7月第6半旬～8月第1半旬の幼虫ふ化期である。

4 フタオビコヤガ（イネアオムシ）

- (1) 近年、発生が増加傾向にある。山間・山沿い地域や集落周辺など、風通しの悪い水田で多発しやすく、また、曇雨天が多い年に発生しやすい。
- (2) 出穂前後に発生する世代の加害が多いと被害が出る場合がある。幼虫が4、5齢に成長すると摂食量が増加するため、被害が急激に拡大するので注意する。

5 イネクロカメムシ

- (1) 常発地では注意する。
- (2) 6月中旬から7月上旬が越冬成虫の水田への移動の最盛期であり、この時期の薬剤防除が最も有効である。ほ場をよく観察し、3株に1頭（幼虫を含む）以上の発生を認めたら防除を実施する。

チャ

1 ツマグロアオカスミカメ

一番茶期に被害を受けた地域では、新芽の萌芽期から開葉期に十分注意する。

2 チャトゲコナジラミ

平成24年6月中旬の巡回調査で、府内全域で発生を確認した。本種の農薬による防除適期は若齢幼虫期である。成虫発生期の散布では密度抑制効果が不十分であるため、成虫の飛翔が落ちついた頃を見計らって薬剤散布を行う。

野菜

1 褐斑病（キュウリ）

発生すると被害が大きいため、夏秋キュウリでは注意し予防に努める。

参 考

I 近畿地方 1 か月予報 (6月16日から7月15日までの天候見通し)

平成24年6月15日
大阪管区气象台発表

< 予想される向こう1か月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、近畿日本海側で平年並または多い確率ともに40%、近畿太平洋側で多い確率50%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率50%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

< 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%) >

	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気 温	20	30	50
降水量 (日本海側)	20	40	40
降水量 (太平洋側)	20	30	50
日照時間	30	40	30

病虫害防除所では上記の天候の1か月予報の表現を「向こう1か月の気温は高く、降水量は日本海側で平年並または多く、太平洋側で多い。日照時間は平年並と予想されている。」としました。

II 用語の定義

1 半月のとり方

	第1半月	第2半月	第3半月	第4半月	第5半月	第6半月
各月の	1～5日	6～10日	11～15日	16～20日	21～25日	26～最終日

2 発生量 — — — 病虫害の発生程度と広がり両面を加味したものをいう。

3 平年値 — — — 原則として過去10か年の平均とする。
データが10年に満たない場合は例年値とする。

4 平年値との比較

1) 時期

平年並	平年値を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
やや遅い	平年値より3～5日遅い
早い	平年値より6日以上早い
遅い	平年値より6日以上遅い

2) 量 (発生量、発生面積等)

平年並	平年値並の発生で10年間に4回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10年間に2回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10年間に2回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10年間に1回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10年間に1回程度しか発生しない量

Ⅲ 予報本文の見方

「予報本文」には発生量等を予想している病害虫を、「今後注意すべきその他の病害虫等」には発生量等の予想はしていませんが、注意すべき病害虫について記載しています。

(見方の例)

3 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比少ない (前年比少ない)
丹波 平年比やや多い (前年比やや多い)
発生時期：第3世代幼虫ふ化期8月第3～4半旬 (平年並)

- ・「予報内容」は、今後の病害虫発生状況や発生時期の予測を平年比として示しています。
- ・平年比の考え方は、「Ⅱ 用語の定義」の「4 平年値との比較」を参照してください。
- ・()内の前年比は予想月の前年の発生量(時期)との比較を示しています。
- ・必要に応じて地域別に示しています。

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、第2世代の発生量は山城で平年比少なく(－)、丹波でやや多い(＋)。
- (2) 第1世代成虫のフェロモントラップへの誘殺盛期は平年並であった。

- ・「予報の根拠」は、巡回調査の結果、天候、フェロモントラップへの誘殺状況、指導機関からの情報等、「予報内容」で示した発生量や発生時期の根拠となった事項を示しています。
- ・文中の(－)、(＋)は、発生量の予想に影響を及ぼすと考えられるもので、(－)の場合は発生量が少なくなる要因、(＋)は発生量は多くなる要因を示します。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、4回世代を繰り返し、第2世代成虫が7月下旬～8月上中旬に発生し産卵する。
- (2) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

- ・「発生生態及び防除上注意すべき事項」は、当該病害虫の生態、薬剤防除や耕種的防除上の留意事項、要防除水準等を示しています。

※病害虫防除については、病害虫防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

詳しい農業情報は、農林水産省ホームページの「農業コーナー」の「農業情報」をご覧ください。

ホームページアドレス http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/index.html

農業改良普及センター 電話番号一覧		
・京都乙訓	農業改良普及センター	075-315-2906
・山城北	農業改良普及センター	0774-62-8686
・山城南	農業改良普及センター	0774-72-0237
・南丹	農業改良普及センター	0771-62-0665
・中丹東	農業改良普及センター	0773-42-2255
・中丹西	農業改良普及センター	0773-22-4901
・丹後	農業改良普及センター	0772-62-4308

農作物病害虫情報サービス

・ホームページアドレス

<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/>

京都府病害虫防除所

〒621-0806 京都府亀岡市余部町和久成9

TEL 0771-23-9512

FAX 0771-23-6539

－農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること－